



白馬のゆくえ 小林萬吾と日本洋画 50 年

香川県三豊市詫間町出身の洋画家・小林萬吾（1868-1947）。彼は日本洋画の黎明期に油絵を学び、黒田清輝のもと白馬会や官展で作品を発表し、東京美術学校で教鞭をとりました。ヨーロッパ留学を経て、自らの様式を模索しながら後進を育成した彼の歩みは、まさに日本洋画の歴史と重なります。明治から大正、そして昭和戦後まで、およそ 50 年の画業を、彼が巡り会い、ともに日本洋画の歴史に名を刻んできた個性豊かな洋画家たちの名作の数々とともに紹介いたします。

展覧会名	白馬のゆくえ 小林萬吾と日本洋画 50 年
会期	2020 年 6 月 20 日（土）～8 月 23 日（日） 月曜休館（ただし、8 月 10 日は開館） ※展示替えあり 前期：6 月 20 日～7 月 12 日 後期：7 月 14 日～8 月 23 日
作品数	約 120 点
会場	久留米市美術館（本館 2 階） ※受付（本館 1 階）にて検温実施予定
主催	久留米市美術館、西日本新聞社、TVQ 九州放送
後援	久留米市教育委員会
協力	東京藝術大学、公益財団法人日動美術財団
スペシャル パートナー	株式会社ブリヂストン
オフィシャル パートナー	学校法人久留米大学、株式会社筑邦銀行、株式会社森光商店、 喜多村石油株式会社、株式会社ユー・エス・イー、株式会社 CIG
入館料	一般 1,000 円（800 円） シニア 700 円（500 円） 大学生 500 円（300 円） 高校生以下無料 ※（ ）内は 15 名以上の団体料金、シニアは 65 歳以上 ※前売券 600 円（チケットぴあ・ローソン）
開館時間	10:00-17:00（入館は 16:30 まで）
交通案内	JR 博多駅より JR 久留米駅まで新幹線で 20 分、快速で 40 分 福岡（天神）駅より西鉄久留米駅まで特急で 30 分、急行で 40 分
本展に関する お問い合わせ	久留米市美術館（公益財団法人久留米文化振興会） 展覧会担当：森山秀子、佐々木奈美子 〒839-0862 福岡県久留米市野中町 1015（石橋文化センター内） TEL0942-39-1131 / FAX0942-39-3134

開催情報に変更がありました場合には別途リリースをお送りし、また、当館ホームページ、フェイスブック、ツイッター等により周知いたします。

久留米市美術館ホームページ <https://www.ishibashi.bunka.jp/kcam/>



展覧会の構成

小林萬吾の画業を 5 期に分け、5 章構成で紹介します。

第 1 章 黒田清輝との出会い

1880 年代、印象派やジャポニズムを横目に本場のアカデミズムを学び、1893(明治 26)年、明るい光をまとった絵画技法を持ち帰った黒田清輝。その画風は日本の画家たちに衝撃を与えました。若き小林萬吾の目に、当時の洋画界はどのように映っていたのでしょうか。萬吾が上京して絵画修業を開始し、黒田清輝に出会うまでを紹介します。

①黒田清輝《婦人像（厨房）》

1892 年 東京藝術大学



第 2 章 白馬会と東京美術学校

1896(明治 29)年、黒田清輝や久米桂一郎のもとに俊英が集い「白馬会」が結成されました。同じ年、東京美術学校には西洋画科が新設されます。アカデミックな土壌と、新風を吹き込む発表の場が、日本洋画界では同時にスタートを切ったのです。萬吾とともに活動した白馬会、そして、ともに学んだ美術学校出身の画家たちによる名作から、瑞々しい明治の姿をご覧ください。



②和田英作《渡頭の夕暮》

1897 年 東京藝術大学

③黒田清輝《木かげ》

1898 年 ウッドワン美術館



⑤小林萬吾《渡舟》

1909 年 香川県立ミュージアム



④児島虎次郎《登校》

1906 年 高梁市成羽美術館



第3章 憧憬ヨーロッパ

洋行は画学生の憧れでした。1900年の万博を契機に、また、大きな戦乱の終結のたびに、留学生の数は倍増しました。小林萬吾が派遣された1911(明治44)年前後には安井曾太郎や藤田嗣治ほか多数が欧州に集結。萬吾も他の留学生と交流し、各国を旅し、制作しました。萬吾の滞欧期間(1911-14)を中心に、彼が影響を受けたり、交流をもった画家たちが描いた1920年代までの作品をご覧ください。

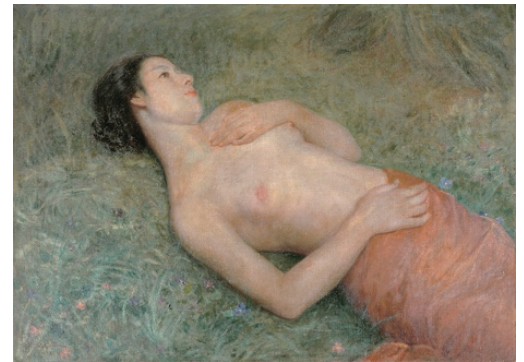


⑥児島虎次郎《和服を着たベルギーの少女》
1910年 高梁市成羽美術館

⑦ピエール・ビュヴィス・ド・シャヴァンヌ
《聖ジュヌヴィエーヴの幼少期》1875年頃
島根県立美術館

第4章 日本の光を求めて

1907(明治40)年、フランスのサロンに倣った第1回文展が行われます。萬吾が留学した1911年に白馬会は解散し、後続の光風会や官展に発表の場は移りました。ヨーロッパからの帰国後、萬吾は自分ならではの表現を追求します。それは同時代の画家たちに共通する問題であり、それぞれの模索が西洋由来の油絵を日本の洋画として成熟させていきます。



⑧岡田三郎助《花野》
1917年 佐賀県立美術館



⑨藤島武二《匂い》
1915年 東京国立近代美術館



⑩小林萬吾《花釦》
1927年 香川県立ミュージアム



第5章 同舟舎から次世代へ

東京美術学校の教授陣は、それぞれが画塾を開くなど、手広く後進を指導しました。萬吾は戦後まもない1947年に亡くなりますが、生前に育てた画家たちが、戦中戦後に大いに活躍します。萬吾に教えを受けた画家には麻生三郎や牛島憲之、駒井哲郎、野見山暁治ら個性的な面々が名を連ねています。画家、そして教師として生きた小林萬吾の薫陶を受けた、次世代の作家たちを紹介します。

⑪牛島憲之《樹》
1949年 久留米市美術館



関連事業

本展覧会に関連する講座、イベント等については
新型コロナウイルス感染拡大予防のため当面実施しません
▶最新情報は館ホームページをご参照ください

作品掲載に関するお願い

1. 作品掲載をご希望の方は、別紙の「画像利用申込書」にて申請ください。
2. 展覧会の広報を目的とした使用に限らせていただきます。二次使用はできません。
3. 作品の文字のせ、トリミングはできません。
4. 当館が指定するクレジットを必ず作品と一緒に掲載してください。クレジットは別紙の「広報画像利用申込書」をご参照ください。
5. 広報用作品以外の画像をご希望の場合は、申込書の「その他」の欄にタイトルを記入してください。
6. 掲載見本を必ず1部お送りください。